

学校に建てられた奉安殿

明治二十三年（一八九〇）年に

発布された「教育ニ関スル勅語」（教育勅語）は、当時の国民の道徳・教育活動における絶対的な方針とされました。発布後、文部省は謄本を作り、全国の学校へ配布しました。各学校では、この教育勅語の謄本と宮内庁から下賜された天皇・皇后両陛下の写真（御真影）を納めるための建物を学校の敷地内に建設しました。この建物は「奉安殿」や「奉安所」「奉安庫」などと呼ばれました。奉安殿は耐火耐震を考慮した頑丈な構造で造られており、デザインはギリシヤ建築風であったり、鉄筋コンクリートやレンガ造りの洋風建築、神社風の建築とさまざまだったようです。町内の学校では、大正時代後半から昭和一〇年代にかけて次々と建設され、古い写真を見る限りでは鉄筋コンクリート造りの神社

風の建築が多かったようです。

上齋原村では、昭和四年（一九二九）に御大典記念事業として小学校の敷地の北側に村費六〇〇円の建設費を支出して奉安庫が建設されましたが、基礎工事に際しては、村内の青年訓練所生徒をはじめ、青年団員・在郷軍人・農業補習学校生徒・小学校児童などが作業奉仕を行ったと記録されています。写真に残る羽出国民学校の奉安殿建設作業風景の写真でも、子供達が石材や木材を運んでいる姿が写っており、

地域が一体となって奉安殿建設に従事することで、愛国意識を高めるという意図があったのかもしれませんが。

こうした経緯で学校の敷地に建設された奉安殿は神聖な場所とされ、祝日には全校生徒と職員が整列して校長先生によって教育勅語が奉読されていました。芳野尋常小学校の当時の「経済更生施設事項概要」の中には

「学校朝会ニ於イテハ奉安殿並ニ大麻（伊勢神宮の御札）奉斎所ニ対シ最敬礼ヲ行フ 又校門ノ出入リニ際シ必ズ之ヲ行フ」と定められ、戦時体制下になると軍国主義的な価値観形成の色合いも濃くなってきました。町内の当時の

想い出話として、

「式典には奉安殿から両陛下の写真が移され上段の扉の中に置かれ、白い手袋をした校長先生が教頭先生の運ばれた黒い箱を開き、教育勅語「朕惟フニ」が何度も朗読され、その間頭を下げてじっとしていいいと注意を受けるきびしい長い長い時間でした。」（泉尋常小学校昭和十二年度卒業生）

という話も記録されているように、戦前の教育の中で奉安殿は大きな存在感を示すことになりましたが、昭和二〇年（一九四五）、日本が戦争に敗れると、連合国軍最高司令官総司令部（GHQ）の指示によって廃止され、多くはその後解体もしくは地中に埋められ、御真影や教育勅語なども適宜回収・処分されました。

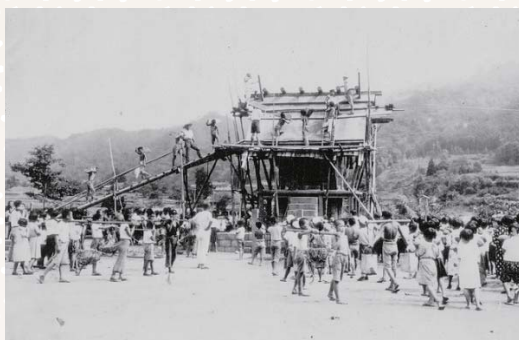
町内の学校には、奉安殿は残っていませんが、教育勅語は中谷尋常高等小学校と泉尋常高等小学校のものが回収を免れて残されており、戦前の教育を知る上での貴重な歴史資料として鏡野郷土博物館において保管されています。

参考：『上齋原村史』『奥津町史』『鏡野町史』

【芳野校史】

生涯学習課 日下

電話（0868）54-7733



羽出国民学校の奉安殿建設作業風景（S16年）



奉安殿（右の建物）に最敬礼する児童達（小田尋常小学校）



泉尋常小学校の奉安殿と教育勅語の入った木箱